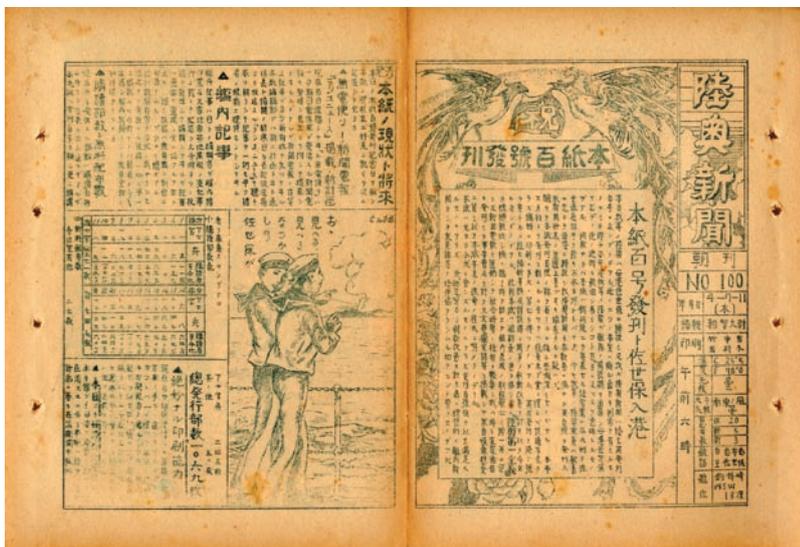


# 国際平和

vol.17 -2 2009.12.1

# ミュージアム

# だより



## CONTENTS

2・ **スポット** ミュージアムの収蔵品 45  
「陸奥新聞」

3・ **巻頭つれづれ**  
初代館長・加藤周一さんのこと  
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長  
安齋 育郎  
〔立命館大学国際関係学部教授〕

5・ 「私たちにとっての加藤周一」  
フォーラムin京都の開催報告

6・ **館長だより**  
情報の質と深さ―「世界報道写真展」から  
立命館大学国際平和ミュージアム館長  
高杉 巴彦

8・ **時評** 2009年のノーベル平和賞  
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長 安齋 育郎  
〔立命館大学国際関係学部教授〕

10・ **ミニ企画展** 開催報告 (2009年8月～10月)

11・ **ここが見どころ** 建物疎開 一銃後の「暴力」―  
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 小関 素明  
〔立命館大学文学部教授〕

12・ **事業報告** 夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2009

13・ **事業報告** 小中学校教員対象下見見学会2009

14・ **事業報告** 2009年度博物館実習報告

15・ **事業報告** 世界報道写真展2009―北海道会場―

16・ **ボランティアガイド活動日誌**  
立命館大学国際平和ミュージアム  
ボランティアガイド・平和友の会 木崎 利夫

17・ **BOOK** 新着図書のご案内

18・ 平和へのメッセージ―常設展示見学者の感想―

19・ 2009年入館者状況 (2009年4月～2009年9月)、編集後記

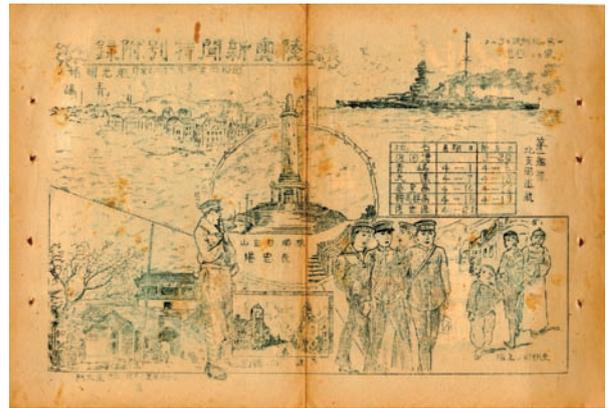
20・ ミュージアムインフォメーション

### 「陸奥新聞」

#### 陸奥新聞



陸奥新聞100号



陸奥新聞特別付録

縦27.5cm／横20cm（綴じた状態）年代：1929年 寄贈者：廣瀬秀夫

「陸奥新聞」は、戦艦「陸奥」の乗員が発行していた艦内新聞です。ザラ紙にガリ版印刷されており、経年変化による変色やシミがありますが、関係者が永い間保存していた資料です。当館では、1929(昭和4)年の2月から10月にかけて発行されたものを約180枚収蔵しています。

大きな艦では艦長も公認の乗員新聞が発行されることがありました。この新聞の正確な発行期間や経緯はわかりませんが、編集欄には常に大尉や少尉など、士官以上(指導層)の名がみえます。また、「本紙の購読料」と題する記事(3月31日付、No.39)には、「艦長50銭、佐官40銭、尉官30銭…二・三等兵3銭」と、階級別の購読料が示されています。1929年当時の艦長は吉田善吾(大佐)でした。陸奥の乗員は1300名を超えますが、まわし読みも含めてほぼ全員が目にしていただいていたのではないのでしょうか。総発行部数は1069枚(7月11日付、No.100)にのびりました。

紙面は、「無電だより」(号により表記が異なる)と題するニュースの抜粋から始まります。無電は無線電話の略です。記事は事件、事故、スポーツ、世相、戦況などを伝えています。続いて、乗員へのメッセージや艦内生活のあれこれ、寄港先の情報や訪問記、読み物や投稿歌などが、イラストを交えて掲載されています。

乗員へのメッセージや艦内生活に関する記事は、活動写真(映画)の上映予告や、「清涼飲料に就いて」(8月3日付、No.122)、軍における性病治療費が巨額なため性病予防を喚起する記事(3月8日付、No.16)など内容は多岐に渡り、当時の乗員の生活が伺われます。

寄港先の情報や訪問記では、「別府温泉」(3月24

日付、No.32)、「青島所感」(4月6日付、No.45)、「舞鶴要港付近案内」(8月21日付、No.130)などが紹介されています。

読み物として掲載された「三等水兵マルチン」(10月9日付、No.181から開始)は、改造社による「世界大衆文学全集」(第31巻)に収められたタフレル作、福永恭助訳のイギリス海軍を舞台にした小説の抜粋です。1929(昭和4)年2月の配本であり、発売直後に入手して掲載したことがわかります。

この資料の発行された1929(昭和4)年は、前年にパリ不戦条約が調印されるなど、世界は戦間期の比較的安定した時期でした。日本も、前年に張作霖爆破事件を起こすなど中国への進出を強化していましたが、侵略を本格化した満州事変の開始は翌年であり、陸奥も戦闘状態ではありませんでした。陸奥新聞の紙面も比較的穏やかな読み物となっています。

戦艦陸奥は、1918(大正7)年に起工、1921(大正10)年に就役した戦艦です。建設時期とワシントン軍縮会議が重なり、一端は廃棄が決まったものの、会議参加各国の保有量を増やすことで、戦艦陸奥の保有にこぎつきました。長門と並ぶ巨艦で国民にも親しまれていましたが、1943(昭和18)年に岩国沖の柱島に停泊中に大爆発を起こして沈没しました。当時付近に在住していた女性は、大きな音と衝撃を感じて外に出ると、陸奥の姿がなく、やがて服や腕や足が流れ着いたが、将校がやってきて、漂着したものには触ってはいけない、軍艦が見えなくなったことは言うてはいけないと命令した、と証言しています。

(学芸員 兼清順子)

## 初代館長・加藤周一さんのこと

立命館大学国際平和ミュージアム  
名誉館長 安齋育郎  
(立命館大学国際関係学部教授)

### ■ 国際平和ミュージアムという館名をめぐって

立命館大学国際平和ミュージアムが開設されたのは1992年です。「国際平和博物館」ではなく、「国際平和ミュージアム」という名前になったのには、設立準備室長だった雀部晶先生（立命館大学経営学部、科学技術史）の思いが反映されていると感じています。雀部先生は立命館大学に赴任される前、国立科学博物館で働いていた専門家です。

「博物館」というと、どちらかと言えば、「明るく軽やか」という印象よりは、「ほの暗く重厚」という印象がありますが、雀部先生は、若い人たちにも関心をもってもらいたい平和教育施設の今後のあり方としては、「明るく、軽やか」というイメージが大切と考えたようです。1992年5月19日、開設記念の「世界平和フォーラム」とともにこの平和ミュージアムは誕生し、翌5月20日から一般の来館者を迎えることになりました。

2008年12月5日に89歳で亡くなられた加藤周一さんは、このミュージアムの初代館長です。「名前だけ」とか「肩書き」とかということが好きでなかった加藤さんは、館長に就任されることに気乗りではありませんでしたが、立命館の熱心な要請に結局応えていただき、私が館長代理を務める体制でスタートしました。

実は、加藤さんは「国際平和ミュージアム」という名称には気乗りがしなかったようです。戦争の問題を扱う限り、国家と国家の関係を問題にするわけですから、「国際」という名前は当然だとお考えのようでした。「平和」という概念の意味内容については議論があるにしても、この社会開放施設は広く「平和」についての問題を扱うわけだから、「平和」という言葉が名称の中に入ることに異論がないようでした。しかし、「ミュージアム」というカタカナ表記にはかなりの抵抗感をもっていました。

加藤さんは5～6ヶ国語で大学の講義ができるほど多様な言語に通じており、それだけにそれぞれの言語がもつ音や音の強弱（アクセント）や抑揚（イントネーション）や綴りや意味内容や語感といったものには人一倍強いこだわりをもっていただいていたようです。加藤さん

は決して「ベトナム」とは書かずに、「ヴィエトナム」と書きました。だから、フランス語の詩なども、安易に日本語の翻訳バージョン（ヴァージョンかな？）で理解したような顔をすることは批判的で、原語で音の流れや感触を味わうことが大切だと感じておられたようです。さあ、そう考えた場合、「ミュージアム」はどうでしょうか？

もともとこの単語は英語のmuseumに由来するものですから、原音からすれば「ミュズィアム」に近く、「ズィ」の部分にアクセントがあるでしょう。だから「ミュージアム」のように、「ミュー」にアクセントが置かれる日本語流の発音にはとても違和感をもっていたのでしょう。

そして何よりも、「日本を日本たらしめているものとは、日本語と京都である」というほど日本語と京都に対する思い入れが強かった人ですから、京都に創る博物館、しかも自らが館長に就任する施設の名称に気乗りのしない表記が使われることには一家言あったのでしょう。加藤さんは、日本語の表現力の豊かさを確信していた人ですから、日本語で表現できるときに安易に外国語を使うことは好みではありませんでした。「博物館」という人口に膾炙した言葉があるときに、なぜ原音に忠実といえない発音をもつ「ミュージアム」という日本語表記を使わなければならないのか、ミュージアム発足後もきっとご不満だっただろうと思います。

今でこそ「立命館大学国際平和ミュージアム」の名前は知られるようになっていますが、発足から10年程はなかなか大変でした。タクシーの運転手さんの中には「ミュージアム」と「ミュージック」の区別がつかない人が少なくありませんでしたし、「ミュージアム」と正しく発音できる人でも、いったいミュージアムとは何なのかが十分理解できず、「何をやる施設ですか？」とよく聞かれたものです。

しかし、国際平和ミュージアムは、戦争だけにこだわらない「平和」の新しい理解にも対応しながら、小中学生を重要な来館者として迎える社会開放施設として、「軽やかさ」や「わかりやすさ」を心がけ、雀部設立準備室長の思いも乗せて、新しい時代の需要に応

えて前進しようとしています。

## ■加藤周一さんとの共同

加藤さんとは、1995～96年には、長崎原爆資料館の総合監修作業に共同して取り組みました。長崎市長が本島等さんから伊藤一長さんに交代する時期のことでしたが、いま思い起こすと、本島市長が天皇の戦争責任問題についての市議会発言で凶弾を浴びたのに続いて、伊藤市長も市役所に身勝手な怨みを抱いた暴力団員の凶弾に倒れたのはまことに理不尽なことでした。

加藤さんと相計りながら、私は長崎原爆資料館の展示の一部に、原爆投下の前史を描くコーナーを設え、南京虐殺事件を含む十五年戦争の略史を年表・写真・映像で展示しましたが、南京事件に関する写真の信憑性などに疑問があるとして私たちはある社会的なグループから批判を受けました。私たちの立場は、もし私たちが監修した展示に事実認識の間違いがあるのなら、指摘を受け入れて修正すればいいという姿勢でした。平和博物館に対する「批判」というと、えてして「対決」という印象に陥りがちですが、平和博物館は社会的な共有財産としての面をもつわけですから、市民が展示のあり方に関心をもち、より良く改善することに貢献することはとても大切なことです。

加藤さんは合理主義者ですから、正しい指摘には率直に耳を傾けるという姿勢です。現代平和学の創造者の一人であるヨハン・ガルトゥングも、同じでしょうね。例えば、南京虐殺事件については、「史実派」と「否定派」と「被害少数派」があると言われますが、ヨハンは基本的に「史実派」の立場にたちながら、主張が「正しい」と考えられる限りにおいて、それ以外の立場の人々の主張にも耳を傾けようとしています。「史実派」の立場にたつ人々には、そうした姿勢が「もどかしい」と感じられることもあるでしょうが、論理的にはその通りなのです。

問題は、何をもち「正しい」というかです。加藤さんは「正しさ」には3つの意味があることを折にふれて指摘していました。①直径に円周率 $\pi$ をかければ円周が求まる、②血液型A型の人はいくつあるか、③死刑制度はあるべきだ、の3つの命題の真偽を考えれば、①は円周率の定義そのもの（円周率 $\pi$ ＝円周÷直径→円周＝円周率×直径）だから「絶対的な正しさ」、②は「いくつあるか」の定義を定めた上で、すべてのA型の人を調べて「いくつあるか」なら正しいし、そうでなければ間違いだから、「条件付の正しさ」、③は「自分はそう思う」という主張に過ぎないから「価値観依存型の正しさ」ということになります。①と②の意味での「正しさ」は、事実や論理に照らして客観的に判断できる

ものですが、③は「正しい」「正しくない」の判断が人によって違うので、客観的な意味で正しいと言える訳ではありません。

それぞれの博物館が展示していることは①、②の意味において正しくなければなりません、どの史実を展示し、どの史実を展示しないかは、その博物館なりの価値観・歴史観に依存します。加藤さんが言っているのは、①②の意味についての批判があれば、客観的に正しいと考えられる範囲において受け入れるべきだということであり、その意味では、指摘した側が鬼の首を取ったようにふんぞり返る必要もないし、指摘された側が（「不明を恥じる」ことはあっても）卑屈になる必要もありません。より良い博物館を創るための共同の営為というべきでしょう。

加藤さんは、特定の価値観に従属させて事実や論理を曲げるような人ではありませんでした。そうありたい—そう思いながら、今は亡き師の影を追う日々です。

## ■「九条の会」の決断

当ミュージアム初代館長としての任期が終わろうとする1995年は、戦後50年に当たる年でした。時あたかも世間では、「憲法を論じるぐらいいいじゃないか」という「論憲論」などの形をとって、改憲への下地が踏み固められつつある時期でした。あるとき私は、そろそろ加藤先生に護憲運動の中核に座ってもらう必要があると思い、「先生、出番ですよ」とご出座を促しました。先生は、「僕はそういうのには向いてない。日高六郎さんに頼みなさい」と言われました。その加藤さんが、2004年、「九条の会」の呼びかけ人になった時には、「いよいよ危機を感じ取られたのだな」と、私は加藤さんの鋭い眼光を思い起こしていました。



講演前に加藤周一さんと打ち合わせる筆者（1991年12月18日 京大会館にて）

# 「私たちにとっての加藤周一」フォーラムin京都の開催報告

2009年6月20日（土）、立命館朱雀キャンパス中川会館ホールにて「『私たちにとっての加藤周一』フォーラムin京都」（同実行委員会主催）を開催しました。

「知の巨人」と呼ばれた評論家・加藤周一氏が2008年12月5日に89歳で逝去されてから半年。こよなく京都を愛し、立命館大学国際平和ミュージアム初代館長に就任（1992年～1995年）され、1988年から2000年まで国際関係学部の客員教授として教鞭を執られた加藤周一氏を語り、その遺志を確認し、参加者それぞれが今後活かしていくつどいとして開催されました。

第1部では、まず実行委員長である安斎育郎・立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長が挨拶し、「加藤さんとは本当にいろんな事を語り合った仲です。加藤さんを亡くした今、なんとも言えない心の境地を迎えています」と故人を偲びました。その後、黙禱、ヴァイオリニスト・松野迅氏による演奏が行われたのに続いて、加藤氏の3名の教え子が「送る言葉」としてメッセージを伝えました。そのうちの1人・山本美穂子さん（文学部学生）は「今、加藤先生と出会えた事が、私の人生における最大の学びとなっています。加藤先生の言葉、考えは私自身の支えであります」と先生への深い想いを語られました。



安斎育郎実行委員長（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）による挨拶

そして片岡幸彦氏（評論家、GN21代表）による事績紹介が行われた後、基調講演として一海知義氏（中国文学者）と山折哲雄氏（宗教学者）が登場され、加藤氏との出会いや対談などでのエピソードを語られました。また日高六郎氏（社会学者）からは「ともに日中戦争に強い批判をもっていたことを知り、共鳴しあった。今も敬愛し続けている」などとしたメッセージが寄せられました。

第2部のパネルディスカッションでは、「加藤氏が伝えなかったこと」をテーマに、君島東彦氏（立命館大学国際

関係学部教授）の司会により、第1部での講演者に加え、桜井均氏（立命館大学客員教授・NHK放送文化研究所主幹）とジュリー・ブロック氏（京都工芸繊維大学教授）を交えて、「加藤周一思想」について議論を行いました。一海氏は、『九条の会』を結成した加藤さんが、若者と高齢者が手を組むことにより戦争放棄を実現しようとしていたことを紹介され、「力を合わせて遺言を実現させなければならない」と呼びかけられました。また山折氏は、マハトマ・ガンジーの非暴力主義について「相手が英国だから成功した」と評した加藤氏に「ショックを受けた」と話され、日本が江戸時代などに長期にわたる平和を実現したことから「日本人もガンジーに共鳴できるのではないかと述べられました。



パネルディスカッションの様子

最後に、加藤氏の夫人である矢島翠さんが「加藤は関西というコミュニティに大変愛着をもっておりました。またこの関西に支えられてきたとも思います」と挨拶されました。当日は、360名の方にご来場いただき、フォーラムは盛況のうちに幕を閉じました。



会場には加藤氏の写真などが展示された

## 情報の質と深さ—「世界報道写真展」から

立命館大学国際平和ミュージアム  
館長 高杉 巴彦

### 北海道ではじめて開催

今年9月に「世界報道写真展2009」を東京より北の地域でははじめて、札幌で開催しました。日本でこれまで開催していました東京、大阪、京都、滋賀、大分に加えて、立命館慶祥中学・高等学校のある北海道の地でも、多くの方々に見ていただきたいと考えてのことでした。

私たちが生きている地球上の各地で、今何が起きているのでしょうか。そして写真家達が生命の危険を冒してまでも伝えたいものが何であったのでしょうか。強靱な報道精神と優れた写真表現にあふれたフォト・ジャーナリズム最高峰の作品展を、北海道をはじめ日本の各地で間近に見ていただき、とりわけ学生さんをはじめとする若い方々に「平和」の意味や地球社会のあり方を考える手がかりにしてもらいたいと考えました。当ミュージアムと朝日新聞との共催で、今年は9月12日（札幌・三越会場）を皮切りに11月29日（京都・立命館大学国際平和ミュージアム会場）まで、立命館キャンパスのある地域を中心に各地で「世界報道写真展2009」を開催し、特に北海道では写真展実行委員会が組織され、写真展の成功に重要な役割を担いました。



### 世界報道写真展とは

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が、前年1年間の世界の報道写真の中から、優秀な写真をコンテストによって選考し、入賞作品は世界中100か所以上で展示されるものです。コンテストはプロの写真家の応募に基づき選考するもので、「スポーツ・ニュース」「アート」など10部門のそれぞれに入賞作品が選ばれ、さらにその中から大賞（グランプリ）を1点選出します。2009年の応募数は124カ国5,508人から9万6千点を超え過去最高でした。フォト・ジャーナリズム中、最も権威あるコンテストといえるでしょう。

またこれを主催する「世界報道写真財団」は、フォト・ジャーナリズムにおける専門家のレベル向上を目指し、職業報道写真家の仕事を国際的に支援し、より盛んにするための非営利団体です。主な活動は、写真コンテスト、写真展、教育・啓蒙プログラムを通じたフォト・ジャーナリズムの認知レベル向上などがあります。

### 報道写真は何を写しだし、世界の「平和」にどう関われるのか

この写真展をはじめ見て見た札幌の来場者からは、「今まで見た写真展のイメージとは違う迫力だ。」「このリアルさに魂が震えた。」「世界の目がこれほど多様だとはじめて知らされた。」などの印象が口々に語られました。

「世界報道写真」というと「戦争」「紛争」中心と考えられがちです。しかし、「自然」の部での、自然災害の写真や絶滅の危機に瀕している動物の保護に関わる画像であったり、中国のリゾート地の湖のほとりの木をめぐる風景、「現代社会の問題」の部では、路上生活者や不法移民などの姿が映し出され、アフリカでの人権抑圧や差別の実相が写し取られて示され、「スポーツ・フィーチャー」の部では、例えば、北京市内のチベット土産店内のテレビ画面に写る中国女子バレーチームの手を振るシーンであったりと、実に多様な地球社会の実相が展開します。世界の人類が抱える諸問題がリアルにかつ象徴的に突き出され、見る者を捉えて離さない深さと強さがあります。



北海道会場 参観者の様子



びわこくさつキャンパス会場 参観者の様子

## 世界の「平和」とは何か

現代平和学では、平和は「戦争の無い状態」ではなく、「暴力のない状態」と理解する見解が潮流となっています。

もちろん「戦争」はもっとも攻撃的で集団的な「暴力」であり、「直接的暴力」といえます。しかし戦争には至らなくても、飢餓・貧困・人権抑圧や社会的不平等、環境破壊、教育や医療の遅れなどが要因で、本来人間の持っている能力を全面的に開花できず、戦争の萌芽が生まれ、また「平和」を脅かす「暴力」が生み出されている現象が世界には山ほど存在しています。こうした「能力の開花を阻害する原因」も、平和をおびやかしている「暴力」の一種であり、こうした社会構造や制度に本質的原因がある場合に、これらを「構造的暴力」と呼んでいます。

私たちには、こうした世界の人類が抱える構造的な諸課題を解決して、人類相互の共生に基づく「持続可能な平和」を創り出し、人間の可能性を豊かに発展させるための行動が求められています。

## 報道写真が伝える情報の質と深さ

2009年の「世界報道写真展」は、こうした人類の諸課題が実に如実に現れた写真展であり、そのテーマは多岐にわたっていると同時に「持続可能な平和な地球」に大きく関わる写真ばかりでありました。大賞を獲得したアンソニー・スアウ氏の作品は、差し押さえで、立ち退きを言い渡された住民が家に残っていないことを確認してまわる警察官の姿が写されています。まさにアメリカのサブプライム・ローンの破綻に端を発した世界不況の現在を象徴する写真といえます。

これらの迫力ある写真に共通するのは、事態の情景や素材を一瞬のうちに切り取り、その本質をつかみ出していることです。一部の組写真を別にすれば、それは散文や短歌ではなく、あたかも俳句の世界のように画像を切り取り、それを見ることによって、見えていない空間をも想像させる力を持っています。

中国四川省の地震災害地で倒壊した家で暮らす被災家族の写真は、その家屋の背景や遠景へと広がる被災状況とともに、見えてはいないカメラマンの後ろの光景も、私たちに容易に想像させます。

前述の大賞を取った写真からは、そこにはいないこの家の持ち主がどこから現れてきそうな想像と、その持ち主が家を購入し、そして手放すにいたった生活の経過に思いが重なります。

こうして写真の持つ切り取った一瞬の画面から、時間軸と空間軸の両面が広がり、立体的で想像的に情報が展開されていきます。これが優れたドキュメンタリー写真の持つリアリティと力強さ、奥行き深さで

はないでしょうか。

ケビン・カーターという写真家が撮影し1994年のピューリッツァー賞を受賞した有名な「ハゲワシと少女」という写真を思い出します。スーダンの飢餓を訴えた写真で、餓死寸前のようにうずくまっている黒人少女を、かたわらで狙っているハゲワシという構図でした。1993年3月のニューヨーク・タイムズ紙に掲載されると同時に、絶賛と批判が寄せられ、「なぜ少女を助けなかったのか」というものであり、「報道が人命か」を問う論争となりました。授賞から1ヵ月後に、カーター氏は車での排気ガス自殺を遂げてしまいました。

実際は、写真撮影後にハゲワシを追い払い、少女は立ち上がって国連食糧配給センターのほうに歩きだしたとのことですが、写真には、写っていない空間的・時間的想像を掻き立てる強い要素を含むわけで、またそのような写真を撮る力量こそ、優れたカメラマンといえるのでしょう。

同時に私たちは、あまりにも大量のかつ画一的映像にあふれた世界に暮らしています。その中から質の良い深い情報をもった画像を読み取っていく力が、受け手の側にも要求されているのでしょう。



展示の様子

### 【世界報道関連企画】

石川文洋氏講演会 “<sup>ぬち</sup> <sup>たから</sup> 戦場でみた命どう宝”  
2009年11月11日(水) 14:40~16:10  
立命館大学衣笠キャンパス明学館96号教室

世界報道写真展2009開催を記念して、君島東彦・立命館大学 国際関係学部教授のコーディネートのもと、報道カメラマン・石川文洋氏をお招きし、講演会を開催いたしました。

命こそ宝である、というメッセージのもと、石川氏がこれまでに撮影してきた写真を使用しながら、自らの体験を語っていただきました。講演会終了後には、質疑応答も行われ、210名の多くの聴講者にご参加いただきました。



# 2009年のノーベル平和賞

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安齋育郎

(立命館大学国際関係学部教授)

## 2009年度のノーベル平和賞

毎年10月初旬になると、新聞社やテレビ局からノーベル平和賞についてのコメントを求められます。「日本時間の夕方6時に発表されるので、その時刻にどこにいるか教えて下さい」というのです。これは困りものですね。いったい誰が貰うのかも分からない段階でコメントを考えるとと言われる訳ですから。

今年もアフガニスタンの人権活動家シマ・サマルさん、ジンバブエのツァンギライ首相、コロンビアのピエタ・コルドバ上院議長、コロンビアの元大統領候補イングリド・ベタンクールさん、中国の市民活動家・胡佳さん、ヨルダンのガジ・ビン・ムハンマド王子などいろいろと下馬評があって、オバマ大統領は、10月5日段階のオンラインの賭け（オッズ）では第17位でした。世界にはこんなことも賭けで楽しむ人々がたくさんいるのです。困みに、第1位はシマ・サマルさんだったのです。

毎年1月に世界中に候補の推薦が依頼されますが、今年は史上最多の205人もの候補者が推薦されていました。確かにオバマ大統領は、4月のプラハでの演説で「アメリカは核兵器のない世界を目指したい」と宣言し、原爆被爆者や世界の反核・平和活動家に大きな希望と勇気を与えた功績は小さくありませんが、しかし、時期尚早との印象は拭えません。なぜ多くの候補者の中からオバマ大統領が選ばれたのでしょうか？

## ノーベル平和賞とは？

ノーベル賞には物理学賞、化学賞、経済学賞（正式には、アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン銀行賞）、医学生理学賞、文学賞、平和賞の6つがあります。物理学賞、化学賞、経済学賞はスウェーデン王立科学アカデミー、医学・生理学賞はカロリンスカ研究所、文学賞はスウェーデン・アカデミー（スウェーデン学士院）、そして、平和賞だけはノルウェー国會によって選ばれます。

アルフレッド・ノーベル（1833-1896）はダイナマイトの発明家として知られたスウェーデンの化学者

であり実業家です。大富豪になったノーベルは、遺産をベースに物理学、化学、医学生理学、文学、平和の5つの分野の業績を表彰する賞を設立することを遺言しました。経済学分野の賞はノーベルの念頭にはありませんでした。

ノーベルには面白いエピソードがあります。ノーベルは、1876年、伴侶を見つけようと思って家政婦兼秘書を公募しました。しかも5ヶ国語で。すると、5ヶ国語で応募してきた人がいました。ベルタ・キンスキー（1843-1914）というオーストリアの女性です。ノーベルは「ベルタこそふさわしい」と感じて、採用しました。ところが、ベルタには将来を約束したアルトゥール・フォン・ズットナーという数学者がいたのです。その年、ベルタはアルトゥールとひそかに結婚しました。ベルタは平和の問題に熱意をもち、1889年には有名な『武器を捨てよ！』という小説を書きました。ベルタの平和への熱意は、ノーベルが平和分野での賞を設定する源になったとも言われていますが、ベルタは平和のための出版や講演活動や会議を中心として社会運動を盛り上げることを目指していましたが、ノーベルは平和条約の締結や国家代表による国際組織といった方向性を目指していましたが、考え方は違っていました。興味深いことに、ベルタ・フォン・ズットナーは、ノーベルが亡くなってから9年目の1905年、女性として初めてノーベル平和賞を受賞しています。

高知の平和資料館「草の家」の山根和代さん（平和のための博物館国際ネットワーク・諮問委員）は、ベルタの業績について日本人にも広く知ってもらおうと、オーストリア大使館とも協力して展示会の開催に努めてきました。きれいなパネルが出来上がっていますので、各地での利用が期待されています。

## ノーベル平和賞の性格

さて、ノーベル平和賞には、「成し遂げた業績に対する表彰」という面とは別に、「平和創造に貢献しそうな人物に対する激励」という面があるのです。小学校の通知表に、「よくできました」というメッセー

ジと、「がんばりましょう」というメッセージがありますね。ノーベル平和賞も同じことなのです。

しかし、なぜ、多くの候補者の中からオバマ大統領が選ばれたのでしょうか？

そのヒントは、オスロ国際平和研究所（Peace Research Institute of Oslo）のハーブピケン所長の事前のコメントの中に見ることができます。ハーブピケン所長は、「現在進行形の政治プロセスに影響を及ぼす人物が好ましい」と言っていたのです。ということになれば、オバマ大統領は有力候補ということになるでしょう。選考に当たるノルウェーでこのような見方が説得力をもっていたとすれば、なかなかシマ・サマルさんということにはならないのかもしれませんが。サマルさんはアフガニスタンの女性大臣を務めた女医さんで、人権問題に熱心に取り組んできましたが、「現在進行形の政治プロセスに影響を及ぼす」という基準を持ち出されると、オバマ大統領の陰に隠れてしまうのかもしれませんが。

もちろん、ノーベル平和賞を過大に評価したり、絶対化したりするような見方は愚かしいことでしょう。ノーベル平和賞は、ノルウェー国会が決める一つの表彰制度の産物であり、それ以上ではないからです。歴代の受賞者をもて、「おや？」と首を傾げるようなケースは、（残念ながら）日本の佐藤栄作首相のケースをはじめ少なくありません。佐藤首相は、国民には非核3原則を約束しながら、アメリカ政府とは核兵器の持込について「密約」していたことが明らかになっています。

また、例えばジャン＝ポール・サルトルは「いかなる人間でも生きながら神格化されるに値しない」といってノーベル文学賞の受賞を辞退しましたし、ベトナムの政治家レ・ドク・トは、ベトナム戦争の停戦交渉への貢献を理由にアメリカのヘンリー・キッシンジャーとともにノーベル平和賞を授与されましたが、「わが国にはなお平和は訪れていない」として辞退しました。マハトマ・ガンジーも、ノーベル平和賞に合計5回内定したと言われますが、固辞したと伝えられます。ガンジーは、自らの意思に基づいて非暴力・不服従運動に取り組んでいたものであり、権威筋に認定してもらうなどという発想はガンジーの本意から最も遠いことだったのかもしれませんが。

## ■ オバマ受賞をめぐる

まあ、オバマ大統領についてはまだ成果を上げる前段階なのですが、核超大国の政治指導者として核兵器

廃絶に向けて発揮したイニシャティヴが世界の人々を励ましたということに対する表彰と、来年のNPT再検討会議に向けてしっかり頑張れという政治的激励メッセージの両面があるのでしょうか。しかし、同時に、「オバマのベトナム戦争」とも言われるアフガニスタン問題を平和的に收拾できるかどうか、また、本当に核兵器廃絶のために政治・経済政策を具体化し、それを実行できるかどうかなど、まだ未知数です。

核兵器廃絶の面では、来年5月にニューヨークで開かれるNPT（核不拡散条約）再検討会議がリトマス試験紙になるでしょう。核不拡散条約は1970年に作られた核軍縮条約ですが、そこには、アメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の核兵器国（1967年1月1日までに核兵器を開発した国々で、いずれも国連安全保障理事会の常任理事国）の核兵器廃絶への誠実な努力と、それ以外の非核兵器国の核兵器保有の禁止を定めています。ところが、これまでアメリカは核兵器廃絶を主導するどころか、むしろ核軍備競争を牽引する役割を果たしてきました。NPT締約国が条約に定められた義務を守っているかどうか、5年毎の再検討会議でチェックされ、2000年に開かれたNPT再検討会議ではアメリカも含めて「核兵器廃絶への明確な約束」をしたにもかかわらず、5年後のブッシュ政権ではその約束がすっかり反故にされてしまいました。そして、2010年の再検討会議を前にして、世界最大・最強の核兵器国であるアメリカに「核兵器のない世界をめざす」政権が誕生し、大統領が「最初に核兵器を使用した核保有国として、構想する道義的責任を有する」とまで言い放ったのですから、世界の期待が大きくなるのは当然のことです。実は、上記5カ国のほかに、NPT条約に入らずに核兵器を開発したイスラエル・インド・パキスタン・北朝鮮の国々に核兵器を放棄させるためにも、アメリカをはじめとする核兵器国が核廃絶の手本を示すことが不可欠です。しかし、オバマ大統領は、核兵器産業の平和的転換や、「強いアメリカ」に固執する保守層の巻き返しなどの難問を乗り越えなければなりません。同大統領へのノーベル平和賞の授与は、「言葉通りの非核政策を不退転の意志で実行せよ」という要求・期待・激励の意味がこめられているのでしょうか。そして何よりも、私たち自身が監視の目を強めるとともに、核兵器廃絶を求める活動を世界中に広げることが引き続き大切であることは言うまでもありません。

## 開催報告

(2009年8月～10月)

今号では2009年8月から10月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

### 第49回 「戦時中の新聞・広告・ビラ」展

会期 2009年8月1日(土)～8月30日(日)

明治維新以降、日本は、海外に占領地や植民地を求めました。資源の確保をする事が目的の1つでした。一五年戦争でも、中国や東南アジアを侵略して得た資源や物資で戦争を続けようとしてきました。しかし、戦局が悪化して占領地や輸送手段を失うと、国内は物資や資源の欠乏状態になりました。当時の新聞記事や広告には、航空ガソリンの原料としての利用が試みられた松の根から作る松根油(しょうこんゆ)の重要性が記され、松根油を掘る小学生の姿が紹介されています。一五年戦争では全国民が戦力であり、戦局が行き詰まると、小学校の授業が戦争を援護する労働に切り替えられました。今展では、戦争末期の代替品を促進する報道を主とした新聞やチラシなどを紹介、また、戦争を助ける労働力となった子供たちが読む雑誌や新聞紙面には戦況や呼びかけがどう書かれていたのか、子供向けの印刷物にもスポットを当てました。新聞広告の資料の他には、当時の小学生をとりまく生活コーナーとして、代用品などの生活用品や玩具などを展示し、戦争の時代に置かれた国民の生活の様子を紹介しました。

今展期間中には、毎年8月恒例の「平和のための京都の



「戦時中の新聞・広告・ビラ」展



紙芝居:少年突撃隊 大日本画劇株式会社製作

戦争展」が国際平和ミュージアム1階ロビーで開催されており、夏休みの小学生が多く訪れ、熱心に見学する姿が見受けられました。また、この展示作業には、博物館実習生が参加し、現場の作業に当たっていただきました。資料キャプションの修正や案内表示の掲示、資料の見せ方を工夫するなど、見学者の視点に立ち分かりやすい展示の実践を行いました。

### 第50回 「平和をモチーフに」

#### 落合峯子作品展

会期 2009年9月12日(土)～10月8日(木)

画家の落合峯子さんは、京都市立美術大学で西洋画を学んだ後、約40年にわたりパステル画の制作を続け、2004年からは日韓の美術交流展にも作品を出品しています。自然と人を描くことから出発した落合さんは、1990年代から作品の中で核兵器廃絶を訴えるなど、平和について積極的なメッセージを発してきました。特に近年は、9.11事件、アフガン空爆、イラク戦争など、現代の世界の動向に思いを馳せ、それをオイルパステルによる多層的な表現で描いています。

今展では、落合さんが戦争にノー、平和にイエスという思いを込めた「鳩に託すヒロシマ・ナガサキの灯」や「世界の空に届け平和の願い」、9.11事件後の世界に思いを馳せた「平和を」のシリーズ画など、落合さんの作品約15点を展示しました。また、平和のメッセージをアクリルカラーで彩色したひょうたんや鬼の面もあわせて紹介しました。来館者からは、心和むおだやかなパステル画の表現の中にもとても力強く平和の思いや願いを訴える力がある、との声が寄せられました。落合さんは、「憲法9条メッセージ・プロジェクト」に賛同し、同プロジェクト刊行の『不戦の希(ねが)い 憲法のこころ 現代の万葉集 巻の1』(2005年)に「平和を」のシリーズ画が掲載されました。この作品は、2005年の当ミュージアムのリニューアル時より、2階平和創造展示室に展示しており、ミュージアムを訪れた方々にご覧いただくことができます。



落合峯子作品展の様子

## 建物疎開 —銃後の「暴力」—

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 小関 素明

(立命館大学文学部教授)

「戦争とは何か」ということを来館者に考えてもらう機会を提供することが平和博物館の大きなテーマの一つです。戦争というのは言うまでもなく武力を行使した人間同士の戦いであり、戦場においては普段の日常生活では考えられない凄惨な殺傷行為が当然のように繰り広げられます。平和の大切さを認識するには、この戦闘の凄惨から目をそらしてはなりません。

ただ当平和博物館においては戦争をもう少し広い範囲で捉えることをも重視しています。なぜなら、戦争の悲惨さは戦場においてだけではないからです。戦争は戦場からは離れた銃後の社会からも協力を引き出すことなしには、遂行することは不可能です。そうした一般社会からの「協力」を強制的に引き出すことを、学問的用語で「国家総動員」もしくは「国民総動員」と言います。それは銃後の社会とそこに生活する一般の国民にも甚大な犠牲と忍従を強いずにはおきません。空襲や砲撃など敵国の攻撃によって被害を蒙るだけでなく、戦争遂行のために自国の政府の強制によって犠牲が強いられた現実が間々あったことを忘れるべきではないでしょう。これは従軍慰安婦問題などを考える際にも留意すべき点です。

こうした点を念頭に置きながら、今回は建物疎開の問題を取り上げてみましょう。皆さんは当博物館展示の「テーマ1 一五年戦争」のなかの「2 国民総動員」のコーナーの一角に京都市における建物疎開の実施区域を示す写真パネルの地図が展示されているのにお気づきでしょうか。疎開と言えば「学童疎開」「縁故疎開」「任意疎開」「強制疎開」など戦時下においては空襲などに備えて「人」の疎開が行われたことはよく知られていますが、建物の「疎開」も行われたということは案外知られていないのではないのでしょうか。

「建物疎開」とは空襲による延焼を防ぐ空地を創出するために国策として強制的に建物を除去した措置で、戦争末期の1944年から全国の279あまりの都市において総計60万戸以上の建物を対象にとり行われました。京都市では1944年7月から翌45年8月までの間に4回計画され、うち3次にわたって実施された結果(4回目は終戦のため、開始直後に中止されました)、1万2千戸あまりの建物が取り壊されました。御池通、堀川通、五

条通など京都市内の大通りのなかでも特に道幅が広い通りは、この建物疎開によるものです。

かつて私のゼミで日本近代史を専攻し、今は京都大学大学院で建築史を学んでいる川口朋子さんが、建物疎開の対象地域であった五条坂に居住し当時を記憶している住民の方に対して行ったヒヤリング調査によれば<sup>註①</sup>、建物の除去は地元の大工やとび職が対象となる家の柱に傷をいれロープを結んだ後、消防団、勤労奉仕の学生、町内会の人々がそのロープを引っ張って引き倒すという手順で進められ、小さい家なら15分ほどで解体されたとのこと。目立った抵抗もなく作業自体はほぼ円滑に進められたようです。

しかし問題はむしろそこにあります。この措置は防空法という法律を根拠に施行されましたから、たとえ抵抗しても強制的に執行されたでしょうが、それ以前に戦争という「国家事業」のもとで、長年住み慣れた家を除去されるという事態に直面しても異議を差し挟むことさえ許さない暗黙の圧力が住民に沈黙を強いていたことを見のがすべきではありません。自分が生まれ育ち、長年の思い出が詰まった家が居住者の目前で、同じ地域住民たちの手によって次々と取り壊されていくというのは何ともやりきれない光景と言うほかありません。戦争というのは、戦場においてだけでなく、銃後においても多くの不条理な措置を強行し、それに対する憤りを封殺してきました。川口さんの研究によって、住居を除去された住民に対する保障も十分でなかったことが明らかにされています。「戦争の暴力」とは、こうした「異議を封殺する圧力」をも含めて考える必要があります。

幸い京都市は、全市が焦土になるような空襲被害はうけなかったため、建物疎開による道路の拡幅はむしろ戦後の交通渋滞の緩和に寄与したと言うべきかも知れません。今では拡張された都大路の上を多くの車が行き交っています。犠牲の代償に利便さを手に入れたわれわれには、その騒音がかつてこうした忍従を強いられた住民たちの憤りをかき消してしまわないように、事実を伝えていく義務があるように思えてなりません。

註 ①川口朋子「京都における広域建物疎開の実態」『人間・環境学』16(2007年)。

## 夏休み親子企画 「へいわ」ってなに?? 2009

日 時：2009年8月1日(土)・8月2日(日)  
10:00~12:00・14:00~16:00  
場 所：立命館大学国際平和ミュージアム ミュージアム会議室  
対 象：小学生以上、保護者  
参 加 者：8月1日(土) 48名、8月2日(日) 77名 両日 125名  
プログラム：120分

- ・挨拶 高杉巴彦館長
- ・平和のお話 安齋育郎名誉館長
- ・みやこエコロジーセンターの岩松さん・鈴木さんと一緒にゴミの減量・環境問題について考えよう。(8/1)
- ・『争、帰、和』など戦争と平和に関する漢字について大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に考えよう。(8/2)
- ・まとめ・平和へのメッセージ記入
- ・参加証授与



平和のお話の様子 (1日目)



講座の様子 (1日目)



講座の様子 (2日目)



参加証授与の様子 (2日目)

今年で4回目となる夏休み親子企画。今年度は昨年のアンケートの意見を参考にし、7月の連休をはずした8月1日・2日の2日間で開催し、子ども、大人合わせて125名の参加がありました。

最初に、高杉館長が挨拶の中で、星座占いやラッキーカラーに触れ、偏った見方をしてはいけない。つまらないことでけんかをしないようにと話がありました。

続いて安齋先生がお話の中で、発展途上国での飢餓や識字率の低さについてクイズを交えて紹介し、いろいろ学んで平和な世の中を作りましょうと呼びかけました。

1日目は、「みやこエコロジーセンター職員の岩松さん・鈴木さんと一緒にゴミの減量・環境問題について考えよう。」というテーマで前半はスライドを使って二酸化炭素による地球温暖化の仕組みについて学習しました。後半はゴミの仕分けクイズ、うちわを使っての発電実験を行いました。子どもたちから「まだまだ使えるものがある。」という声や、がんばってうちわであおいで作った電気がとても少ない事への驚きの声があがっていました。

2日目には、「平和に関する漢字について大学生のお兄さん、お姉さんと一緒に考えよう。」として『争・戦・和』など戦争や平和と関係のある漢字の成り立ちをグループで話し合いながら考えていきました。

この企画に参加した子どもたちには、平和と私たちのくらしについて学んだことの証となる夏休み親子企画の参加証が授与されました。

### 参加した保護者の方々からの感想

●平和とエコ、両方別々ではないと子どもは感じたようでした。これからの地球・・・自分で考えるきっかけになれ

ばよいと思いました。

- 今までの平和との感覚が変わってきていることを実感しました。これからは世界視野でいろいろな方面へ目を向けていかなければ、いけないと思います。地球規模で平和を考えなければいけない。
- 安齋先生のお話を楽しく聞いて、戦争以外で平和を考えさせられた。自分が置かれている環境が幸せであることを改めて知ることができた。
- 安齋先生の手品で子供が楽しく話を聞けました。京エコロジーセンターの方の話や実験が子供にも分かりやすくよかったです。

### 小学生の子どもたちから寄せられた平和へのメッセージ

- 平和ってせんそうがない世界って思ってたけど1人1人の能力を思いっきり出せることというのも1つの平和ということがわかりました。
- 世界のこどもがごはんを食べれたり学校に行けたりできたらいいな。
- 世界には学校に行けないひともいるけどその分、ぼくはしっかりとべんきょうをして助けたいと思いました。
- 自分のことばかり考えず、人のことも考えたらいいと思います。
- 世界中の人達が、笑顔になれるようになったらいいな。世界中が核兵器を作らない、争うことのない時代が来ることを願います。
- 私たちは平和かもしれないが、世界中では平和ではない国もあってかわいそうだけど私が今集めているペットボトルのキャップでワクチンを作り、助けてあげたいです。

## 小中学校教員対象下見見学会2009

開催日時：2009年7月29日(水)・30日(木)・31日(金)、8月20日(木)・21日(金)・27日(木) 13:00~14:40

所要時間：100分

参加者：48校 88名

内容：挨拶 高杉巴彦館長

平和講義体験 安齋育郎名誉館長

・安齋名誉館長による小学校・中学校向けの「ミニ平和講義」を聴講。

展示見学 ボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフ

・短時間で常設展示をボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフの解説付きで見学。

収蔵品(もの資料)の紹介、教育教材としての活用 学芸員

・収蔵品4万点の中から、希望のもの資料をガラスケース展示し、学芸員の解説付で見学。

個別相談会(各種サービスのご案内など)

・ワークシートやガイドブックの事前送付等、各種サービス案内。



学芸員による収蔵資料紹介の様子

昨年に引き続き、戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を小中学校ならびに高校の先生方と共に考え、ミュージアム見学につながる機会を持ちたいとの思いから7月、8月に主に小・中学校の先生方を対象に下見見学会を実施しました。



ボランティアガイドによる展示説明の様子

当ミュージアムの見学者の多くは、小・中学校の児童生徒の修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的での団体見学となっています。昨今の国際的状況を考えますと、戦争の悲惨さを若い世代に語り継ぎ、地球環境・人権などを含み平和創造の取り組みを発信するという当ミュージアムの責任は、ますます大きくなっていると自認しています。

このような背景からミュージアムについて知っていただき、教育現場での利活用を考えていただけるよう、先生方が校務や個人でも気軽に参加できるよう、前日までの参加受付可、参加料金は無料、夏休み中複数日の開催日程の設定など参加のしやすさを工夫しました。

本年度はこの見学会に48校、88名の先生方にご参加いただきました。この見学会に加え、個別に下見見学に来館された学校もあり、全体では、昨年を上回る89校、259名の先生方にご来館をいただきました。これを機会に小・中・高校の先生方と来館する子どもたちと一緒に平和創造について考えていくことができればと思います。

当日参加された先生方からご意見・ご感想をいただきました。プログラムについては多くの先生方に満足いただくことができました。引き続き頂いたご意見を次回開催に活かしていきたいと考えています。

### アンケートより一部抜粋

- いろいろな資料が揃っていて、大変興味深い構成だった。ナビもしていただけるので、分かりやすい。(小学校)
- やっぱり物や写真、的をえた説明は、子どもの心にずしんとひびくと思う。何よりこのミュージアムの方々それを真剣に考えてくださっているのが教師に感じられるし、子どもにもそれを感じさせたいと思いました。(小学校)
- 以前きた時は見学会の日ではなかったのですが、そのときでも丁寧だなと思っていました。今回本当に分かりやすく、1つ1つの資料の意味が分かりました。(小学校)
- 説明、講義が知らないことなどを話してくださり勉強になった。子ども達への話についてもわかりやすく、聞かせてやりたいと思った。(小学校)
- 想像していたよりも、はるかに展示物などが整備されていて、社会見学等に十分利用されると思いました。(小学校)
- 以前にも下見には来させていただきましたが、見学会は初めてでより深く、このミュージアムの意義が理解できました。(小学校)
- 安齋先生の平和講義が大変よかったです。30分がとても短く感じられました。高杉館長さんのゆっくり話しかけられる言葉のひとつひとつも心に残りました。また、短い時間をやりくりして、とてもわかりやすくポイントを押さえながら説明して下さったボランティアガイドさんや学生ガイドさんのお話もよかったです。(小学校)
- これまでも何度か来たことがありますが、今後も自分の勉強のため機会があれば、また来させていただきますと思っています。自分の母校がこのような施設を作っていることを誇りに思います。(高校)



学生ミュージアムスタッフによる2階の展示説明の様子

## 2009年度博物館実習報告

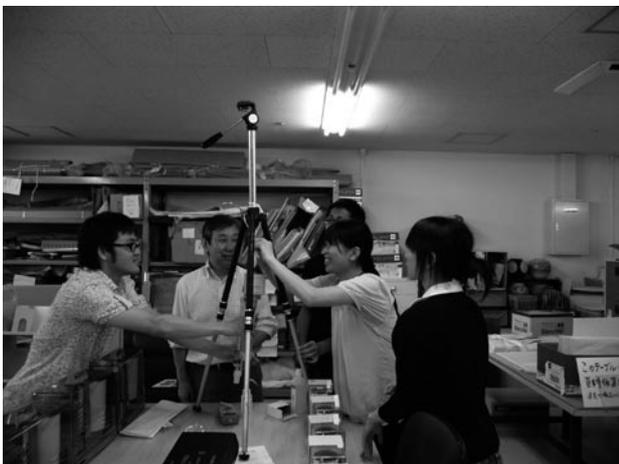
立命館大学国際平和ミュージアムでは、6月28日から9月21日までの間に3回、各回4～6名の実習生を受け入れて博物館実習を行いました。1回目は日曜日を利用した分散日程、2回目と3回目は連続日程で実施し、立命館大学11名、他大学3名の計14名が参加しました。また、各回とも1日は堂本印象美術館にて実習を行いました。

博物館実習は、学芸員資格を取得するための必須項目です。文部科学省の「博物館実習ガイドライン」によれば、学芸員養成教育の中で学んだ知識と技術と理論を活かして現場での実践を経験し、学芸員としての素養を身につけるとともに、適正や進路を考える機会です。

実習指導では、学生が博物館の仕事に対する包括的な理解を深めること、実際の作業を経験すること、それまで学んだ資料保存や展示教育に関する知識を総合して考える機会を持つことを重視しています。

短期間の実習で博物館の多様な面を理解するのは難しいことですが、少しでも多くの面に目を向けてもらうため、ミュージアムの総務や広報などを含めて全職員が担当し、説明しました。実習生からは、こんなに多くの仕事が博物館を支えていることを知り、驚いたという感想が聞かれました。

実際の作業は、倉庫の掃除、温度湿度計の操作や調整、資料整理、写真撮影などの学芸業務が中心です。気温が36度を超える倉庫での作業など、過酷な仕事もありますが、全て、当ミュージアムの学芸担当職員の仕事の一部です。



温度湿度計の調整中の様子



実習生が改善に取り組んだミニ企画展示室

そしてこうした作業の中で、実習生がそれまで学んだ知識を作業に結びつけたり、新たな課題を発見して改善点についての工夫を凝らしたり、新たな知識や認識を獲得する機会が訪れます。

本年は、こうした実習ならではの学びの機会を促進すべく、展示の改善実習に力を入れました。具体的には、以下のように進めました。

- 1、実習生が個別に展示を見て問題点をあげる。
- 2、問題点について実習生同士で話し合いまとめる。
- 3、問題点の改善策について実習生同士で話し合いまとめる。
- 4、実習生が実行可能な改善策を実施する。

2、3、4では、必要に応じて職員が説明を加えます。例えば、「展示が暗くて見えにくい」のは、資料保存面から照明を落としている場合があります。またよい案であっても、消防法上できないこともあります。様々な視点と実際の判断の根拠を具体的な事例の中で考えていく、小さなワークショップのような実習です。

実習生は、「作業は予想以上に時間がかかり、時間管理の重要性を感じた」、「情報を盛り込みながら子どもにわかりやすい文章を書くのは、非常に難しい」、「資料保存面から見せ方にも制限があることを知り、展示は資料の一面でしかないことを考えた」、「もっと時間をかけて写真を取り直したかった」などの感想を述べていますが、自分達の手で改善することの手ごたえは感じていたようです。

## 世界報道写真展2009 – WORLD PRESS PHOTO2009 – ～北海道会場～

会 期：2009年9月12日(土)～21日(月・祝)  
 会 場：札幌三越 10階 特設会場  
 参観者：約4,615名  
 主 催：世界報道写真展2009北海道実行委員会、立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団  
 後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、江別市、江別市教育委員会、北広島市、北広島市教育委員会、石狩市、石狩市教育委員会、NHK札幌放送局、北海道放送株式会社、北海道テレビ放送株式会社、北海道高等学校文化連盟、北星学園大学・北星学園大学短期大学部、札幌ユネスコ協会  
 協 賛：キヤノン株式会社、キヤノンマーケティング株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社  
 北海道：アサヒビール株式会社、医療法人タナカメディカル札幌  
 協 賛 田中病院、学校法人北海学園(北海学園大学・北海商科大学)、株式会社DNP北海道、株式会社JAサービス帯広かわにし、株式会社JTB北海道札幌支店、株式会社アークス、株式会社紀伊屋書店、株式会社共立メンテナンス札幌支店、株式会社さきんでん、株式会社熊谷組北海道支店、株式会社クレオテック北海道事業部、株式会社ジュンク堂書店、株式会社ダイヤ書房、株式会社ニッセンレンエスコート、株式会社ニトリ、キヤノンマーケティングジャパン株式会社札幌支店、札幌グリーンライオンズクラブ、サッポロビール株式会社北海道本部、北海道旅客鉄道株式会社、立命館慶祥中学校・高等学校教育振興会

### 【記念講演会】

講演会：2009年9月13日(日)  
 時 間：14:00～16:00  
 会 場：大学共同研修施設ACU 研修室O  
 講 演：『いのちについて』  
 守分 寿男(映像プロデューサー・演出家)  
 『紛争地域の現場から』  
 林 直光(写真家)  
 聴講者：約50名



講演会の様子



オープニングセレモニーの様子

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品(約200点)で構成した写真展で、今年で52回目を迎えます。4月にオランダ・アムステルダムをかわきりに、世界中の100カ所以上を巡回する展覧会です。

今この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。時に命がけで撮影された報道写真を間近でご覧いただくことで、世界の様々な側面を知り、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにしたいと大きく開催しました。

今年度は初めて、日本でこれまで開催しておりました東京、大阪、京都、滋賀、大分に加え、北海道でも開催をしました。

開会に先立ちまして、オープニングセレモニーを催し、会期2日目には、講演会を開催しました。守分寿男氏と林直光氏の自らの体験に基づいた貴重で示唆に富むお話は、参加者に深い感銘を与えました。

延べ4,615名もの来場者があり、写真展を熱心に見学された方からは迫力ある写真を目の当たりにして、驚きをもった高い評価がなされていました。



会場の様子

### <世界報道写真コンテストについて>

前年1年間に撮影された報道写真を対象に開かれる写真コンテストです。プロの写真家であれば誰でも応募することができます。「スポット・ニュース」「スポーツ」「アート」など10部門があり、それぞれ単写真と組写真で入賞作品が選ばれ、さらにその中から大賞(グランプリ)を1点選出します。今回は過去最高の124カ国5,508人から9万6,268点の応募がありました。入賞作品はニュース性と写真表現に優れたフォトジャーナリズム最高峰の作品といえます。

国際平和ミュージアムでは、来館者に展示資料をわかりやすく解説するボランティアガイドの皆さんが活躍しています。今回はガイド部会長の木崎さんに「日本母親大会」参加者の見学についてお話しいただきました。

## 女性の平和を求める情熱とパワーに圧倒されて ～日本母親大会の参加者をガイドして～

立命館大学国際平和ミュージアム  
ボランティアガイド・平和友の会  
木崎利夫

新政権の発足で期待感が広がっているようですが、改憲の動きが収まったわけではありません。ところで「憲法9条を守る」ことに賛同する人は女性が男性を上回るという世論調査の結果がコンスタントに出ているとのこと。なんとも日本の女性は頼もしいものです。その情熱が遺憾なく発揮された日本母親大会が7月末に京都で催されました。

7月26日には、その分科会会場にあてられた、立命館大学衣笠キャンパスから立命館大学国際平和ミュージアムにかけて、平和を希求する人達の熱気で満ちていました。曇り空の朝、ガイドに駆けつけた私の目に映ったのはタクシーから慌ただしく降りてくるグループも含めて、続々とミュージアムのガラスドアを押し開けて入っていくご一行様の姿でした。見学予定時間の10時を待ちきれず次々と展示室を目指す人の波を目にして、私も大急ぎで地下へ向かいました。

展示室の入り口付近は瞬く間に人が溢れてきたのを見て、取り敢えず近くの一団をひとまとめにして引率がてらにガイド口調でしゃべり始めました。やがて10数人の集団が形成され会話のできる雰囲気になり「日本の軍隊」から説明に入ります。軍隊の非情さを述べた後で私はおもむろに「何歳から志願兵になれたと思いますか」と質問をだしました。すかさず「15歳」との返答がきて「さすが」との私の対応に、感嘆するような息を吐く声が洩れたところで「ちょっと惜しい、実は一つ小さい14歳」と付け加えると、わぁという溜息まじりの笑いがでました。これで打ち解けた空気が漂い、ペースを掴みます。

続いて「この人が戦争の最高責任者です」と、私は上段の写真を指します。即座に「昭和天皇」と返答がくるところが、今日の団体の感性が鋭いところです。別の表現では自覚的な集団という意味ですから、「上辺だけの説明では許されない」という気持ちにさせられます。

私は天皇のために命を捧げることが使命と兵士に叩き込んでいた愛国心教育の恐ろしさに触れます。そのためには「特攻」をお座なりに済ませられないので、少し長めの解説をしました。なぜならこの命を賭した若者を愛国の士と賛美する人はいまだに多くいるからです。それは「この人達がいたから現在の平和がある」と

いう見当違いのコメントをするテレビキャスターがいるようです。だから「こんな残酷な戦法を賞賛した首相が二代続けていたことは恥ずかしいことです」と力説すると、どこからともなく拍手が起きました。思わず気をよくして、日本軍の加害行為にも時間をかける成り行きになってしまいました。

それは近年中学校の教科書から削られている史実の数々が中心になります。特に無残にも人生を台無しにされた若い朝鮮人「慰安婦」の人達のパネルの前で、熱く語りました。中年以上の方の多い皆さんの熱い眼差しを感じていた中で、私の目の隅にメモをとる若いお母さんとおぼしき女性の影が映りました。ここに重点を置いて正解だったかなと自分で納得したのでした。気が付くと、予定時間の残りは30分くらいになっているではありませんか。

バタバタと時間と追い駆けっこになり、平和を求めたのコーナーにさしかかりました。治安維持法の犠牲になった人々では京都に関わる話題が多いので、平和の教材には格好の展示のところ。折角京都まで来ていただいたのだからと、この地の先駆的な働き物語を抜きに帰すわけにはいきません。私が山宣や小林多喜二の最期に触れ、この人達こそが真の愛国者ではないでしょうかと周囲を見回すと無言で頷く顔、顔がありました。弾圧のすさまじさに声が出なくなったのでしょうか、口数の少なくなったグループを京都の空襲へ案内したところでタイムアップの連絡が入ってきました。いつしか10人足らずの集団になったとはいえ、最後まで私に従ってきてもらった皆さんにお礼を言ってお別れです。お互い平和のために力を合わせましようという言葉を中心で交わしながら……。

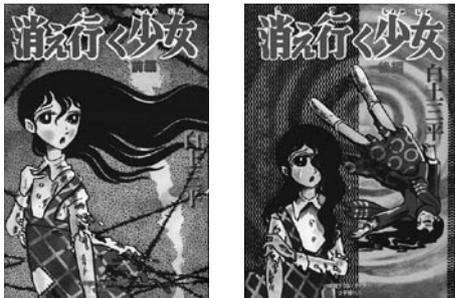
いつも思うことですが今回も女性の平和を求める情熱とパワーに圧倒され、励まされたガイドでした。「いつまでも反戦・平和の担い手を女だけに任せていてはあかんよ」と気合いを入れられているようでもありました。当日の母親大会からミュージアムへの来館者は700人を超えたとか、その熱意に脱帽。そして当日に参加してもらった10数人に及ぶボランティアガイドの方々に感謝深謝です。

## ◆◆ 新着図書のご案内 ◆◆

国際平和ミュージアムメディア資料室で受け入れている、新着図書のご案内です。

### 消え行く少女／白土三平著 2009.3~4

小学館クリエイティブ  
前編 ISBN:9784778031138  
後編 ISBN:9784778031145



今年、公開された映画「カムイ外伝」でも知られる白土三平の長編少女漫画(1959年、日本漫画社刊)が、復刻刊行されました。広島で被爆した雪子を通じて、平和とは何かを今改めて考えさせる異色作です。付:各巻末「読本」中野晴行氏(評論家)、佐藤優氏(作家)。

### ナガサキノート: 若手記者が聞く被爆者の物語/ 朝日新聞長崎総局編

朝日新聞社出版(朝日文庫)2009.7  
ISBN:9784022616388

2008年8月10日から2009年5月14日まで、朝日新聞長崎県内版に掲載された「ナガサキノート」を再構成した、ナガサキ被爆者31人の記録です。取材・執筆は、「親も戦後生まれ」という若手の20~30代の記者たちが担当しました。



### 平和学を学ぶ人のために/ 君島東彦編 世界思想社 2009.7 ISBN:9784790714200

大学で平和学の講義を受講している学生や、平和問題に関心を持つ市民に活用されるために編まれた図書です。編者の君島東彦氏は、立命館大学国際関係学部教授。専門は憲法学、平和学。ほか19人の執筆者で編纂されています。



### ベト・ドクが教えてくれたもの: 分離手術成功20周年と平和へのメッセージ/ ベトちゃん・ドクちゃんの発達を願う会 [ほか] 編

クリエイツかもがわ 2009.5  
ISBN:9784863420236

ベトナム戦争時にアメリカ軍が大量に散布した枯葉剤の影響で、1981年2月25日に南ベトナムで結合双生児として生まれたベト、ドクを支援し続けてきた「ベトちゃん・ドクちゃんの発達を願う会」の記録です。



### 私が見た戦争／石川文洋著

新日本出版社 2009.8  
ISBN:9784406052689



戦場カメラマンとして、世界を取材してきた著者が撮影した仕事を集大成する。ベトナム戦争はもちろん、未発表写真の多いボスニア、ソマリア、沖縄の基地と日本の戦跡...240枚の写真が反戦を強烈に訴えます。ミュージアムでは、石川文洋氏撮影のベトナム戦争の写真と戦火ををくぐり抜けたカメラ(ニコン・ライカ)を展示しています。

### 無言館／京都館一いのちの画室

2階展示室の奥に長野県上田市にある戦没画学生の慰霊美術館「無言館」の京都館を開室しています。

### 新版 戦没画学生人名録/ 戦没画学生慰霊美術館「無言館」編 編集協力:「信濃デッサン館」出版部 2009.8

無言館は窪島誠一郎氏により、信濃デッサン館の分館として1998年に開館した美術館で、昨年9月に第2展示館が開館しました。2000年に刊行された元版の「人名録」に新しく加えられた画学生も加え489名の経歴と遺作品を収録しています。現在、無言館・京都館(当館)では、そのうち12名の画学生の作品を展示しています。



### ボイスライブラリー:無言館の証言/無言館編 新日本出版社 2009.10 ISBN:9784406052856



「非常に、短い間にきらっと光るものがあった」と語る妻、「帰ってきてからまた描くから」と出征した画学生、「絵を一枚でも多く防空壕へ入れよう」とした父...。知られることのない遺族の声が編集、出版されました。戦没画学生の「命の輝きと死の無念」を痛切に語った証言集です。無言館・京都館(当館)で展示する6名の画学生の遺族の証言が載せられています。無言館・京都館では、作品は年に数回、更新される予定です。

### メディア資料室のご案内

国際平和メディア資料室は、約23,000冊の図書と約9,000冊の雑誌、約800本の視聴覚資料(映像・音声資料)を所蔵しています(2009年4月現在)。

図書・文書、メディア資料を中心に、平和に関する資料を中心に、当ミュージアムの展示を見て、

「もっと知りたい」  
「もっと調べたい」

と感じた方であれば、どなたでも無料で利用することができます。なお、蔵書は立命館大学図書館が提供する所蔵検索(RUNNERS)で検索できます。配架場所【衣笠国際平和ミュージアム】と表示された図書館資料はメディア資料室で利用することができます。館外貸出は行っておりません。閲覧・複写のみの利用となっています。ぜひお立ち寄りください。

開館時間:9:30~16:30(入室は16:00まで)  
利用は無料です



## 常設展示見学者の感想

戦争が二度と起こらないでほしい。

(愛知県 小学生 男性)

平和は大切。平和になればいいっていうことは分かっているけど、「本当に世界が平和になるの？」って考える。難しいことで無理かもって思ってしまう。でも今日「人々は平和を願っている」と思うことができた。ベトナム・イラク戦争が起こったとき世界中でデモがおこった。これは戦時中「戦争反対！」といえなかった時代が終わったっていうことだ。とても嬉しかった。これこそが平和への第一歩なんだ。

(奈良県 本学附属中学生 女性)

今まで知らなかった戦争のことがわかった。もしかしたら福岡に原爆投下されていたかもしれなかった。だとしたら、今私は生まれていなかったのかもしれない…と思った。

(滋賀県 中学生 女性)

1つ1つの展示品が戦争の悲惨さを物語っていて、背筋が凍るような思いでみさせていただきました。教科書や本でみたことのある言葉を1つ1つ実物としてみていくことで勉強にもなったし、それがどれだけの重みがあるかを知ることができました。

(京都府 本学学生 10代)

現在教員として教壇に立つものですが、私自身が現生活の中で、平和について考える時を持っていない事に時折、ニュースを見てハッとさせられます。意識して、生活を振り返らなければ、再び過ち(=戦争)をこの日本でも起こると思っています。この危機感を、生徒達に伝える使命を忘れずに教育に携わる者としての責任を今日、ここで、新たに致しました。ありがとうございました。

(京都府 女性 30代 高等学校非常勤講師)

改めて戦争はいけないと思ったし、地震やクラスターばくだんなどが危険だと思ったのでやっぱり戦争や、いくさはやめた方がいいと思いました。

(愛知県 小学生 男性)

もしも、今の時代日本に戦争があったら、今の自分たちがいないと思いました。どこの国でも今でも戦争をしているけど、本当に戦争は、あってはいけないものだと思います。いくら国どうしの仲が悪くても、小さな子どもから何のつみのない人まで、同じ苦しみをあじあわなければならぬのは、すごくいけないことで、だれかがこの戦争をとめないといけなくと思います！

(東京都 中学生 女性)

戦争の歴史や出来事は知っているけど、ここに来るとその時の人の心情や場の状況などが分かって、とても勉強になった。その時の実際の資料や写真が展示されているのでとても分かりやすくみていてあきなかったし、場面がいろいろと想像できて良かった。

(東京都 中学生 男性)

具体的な展示物が当時の様子を無言に語っていました。日本は先の大戦で、多くの尊い命を失ったにも関わらず戦後は経済大国になることにのみ邁進し、大人も教育機関も先の大戦を冷静に直視することをさけてきたように思います。未来をになう子どもや若者こそが平和について(戦争のおろかさについて)真剣に考えることが大切です。本来なら日本の各地にこのような平和ミュージアムを持っているはずなのに、とても少ないです。貴大学がこのようなミュージアムをもっていることに対し、敬意を払います。ここを多くの子どもや大人が訪れ平和について考える機会にしてくれることを願います。

(女性 50代)

いろいろと戦争のおそろしさを知ることができました。これからも、平和について考えていきたいです。今、社会でも、戦争がおきているので、やめて欲しいと思いました

(愛知県 小学生 女性)

今の時代がもしも戦争になりそうだったら、100%反対です。どこの国も傷ついたり、傷つけ合ったりするのはもうやめてほしいです。戦争をしても、ただ犠牲者が出るだけです。絶対戦争は反対です。

(東京都 中学生 女性)

とても戦争のこわさを知ることができました。

(兵庫県 中学生 女性)

戦争は人々の罪であり、傷です。戦争をしらない私はこの事実を、過去の記録からしか知ることができません。でも私は戦争を決して過去の終わった歴史としてみつめたくはないのです。本当に戦争を体験した人々の心の苦しみを理解することはできないけど、せめて彼らとしっかり向き合う努力を怠ってはいけないと感じています。それが現代に生きる私の責任、そうつくよく感じました。

(京都府 大学生 女性 20代)

悲惨な過去を知るのは辛い。今の自分のおだやかな生活から戦争の現実を引き込まれることは本当に辛いし心が痛い。できればあまり知りたくない。でも自分が戦争の当事者となった時、「ノー」と言えるか、他を思いやることができるのか、自分がひどいことをしないという自信はない。だからそんな状況にならないために今時分はどう考え、何をすれば良いのかそれを知りたくてここにいる。人間とは弱い者、身を犠牲にしても、信念を守れる人はどれだけいるのだろうか。

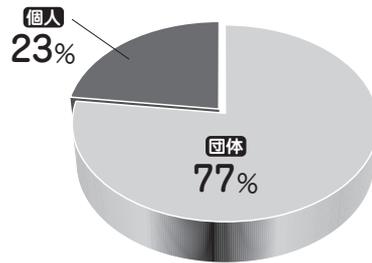
(奈良県 50代)

2009年4月  
～2009年9月  
入館者状況

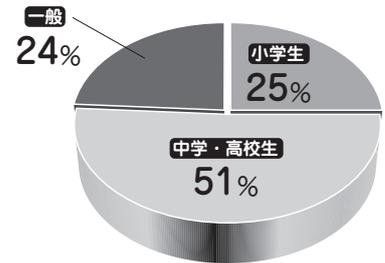
◎開館日数 149日

◎オープン後常設展入館者数累計 659,844名

<有料団体・個人入館状況>



<有料団体入館者数状況>



2009年度		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	人数計(名)
常設展	個人(有料)		338	492	417	689	1,178	425	3,539
	団体(有料)		1,565	1,608	2,330	2,748	1,022	2,511	11,784
	無料		1,125	994	587	846	847	259	4,658
	特別展より		31	400	-	-	-	-	431
	小計		3,059	3,494	3,334	4,283	3,047	3,195	20,412
特別展	春季特別展 『岡部伊都子回顧展』							(4/28～5/31)	3,954
	秋季特別展 『世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—』								
	北海道(札幌三越)会場							(9/12～9/21)	4,615
	小計								8,569
講演会	岡部伊都子回顧展(国際平和ミュージアム 1階ロビー)								
	記念講演会 窪島誠一郎氏×池田良則氏×尾形明子氏 『岡部伊都子を語る』							(5/16)	261
	私たちに与った加藤周一 フォーラムin京都(朱雀キャンパスホール)							(6/20)	360
	映画上映会「アメリカばんざい」(衣笠キャンパス 以学館2号ホール)							(7/4)	204
	対談 藤本幸久監督×君島東彦教授(立命館大学国際関係学部教授)								
	下見見学会							(6日間・7/29～7/31、8/20、8/21、8/27)	88
	夏休み親子企画 『「へいわ」ってなに?? 2009』							(8/1、8/2)	126
	世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—								
北海道記念講演会 守分寿男氏 『いのちについて』									
林直光氏 『紛争地域の現場から』							(9/13)	50	
	小計								1,089

編集  
後記

今年度前半期は新型インフルエンザのあおりで入館者数が減少し、今後も状況は厳しそうです。今年初の試みとしての北海道での開催をすでに終え、当館で開催された世界報道写真展の入館者数に大きな影響が出ないことを祈りたいと思います。

総選挙における自民党の大敗、オバマ大統領のノーベル平和賞受賞などいろいろなことがありました。オバマの受賞が核兵器廃絶に向けた努力が評価されたことによるのならば喜ばしいことですが、アフガニスタン問題などを考え合わせるとどう評価すべきか難しいところではあります。また自民党の大敗(民主党の躍進)が日本の民主化と国民生活にどのような影響を及ぼすかも同様に安易な評価を許しません。

こうした時こそ慌てずにしばらく事態を静観する、もしくはこうした時なればこそ失敗を恐れず果敢な発言をあえて辞さないなど様々な対応があり得るでしょうが、あたかも我々の覚悟や気概が試されているかのごとくです。いずれにせよ、従来のような紋切り型の評価や対応が通用しなくなってきたというのは確かなようであり、喜ばしいことです。

しかし旧来の固定観念の見直しを迫られたとしても、平和の大切さは普遍的です。その思いを新たに、平和の大切さを次世代にどのように伝えていくのか。まさに思考の粘着力、大胆な発想など総合的な知的体力が必要です。その難題に向けてミュージアムスタッフ一同知恵を合わせ、研鑽を重ねていきたいと考えております。どうか皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

小関素明

# ミュージアムインフォメーション

## ミニ企画展示室

### 第51回ミニ企画展示

「立命館附属校平和教育実践展示」開催中

会期：2009年10月11日(日)～12月18日(金)

11/22(日)～12/4(金) 立命館小学校

12/6(日)～12/18(金) 立命館慶祥中学校・高等学校

立命館小学校4年生の平和学習について、また立命館慶祥校の展示では、中学3年生と留学生を迎えて、平和に関する意見交換を展示いたします。

以下は全て終了いたしました。

10/11(日)～10/23(金) 立命館中学校・高等学校

10/25(日)～11/6(金) 立命館守山中学校・高等学校

11/8(日)～11/20(金) 立命館宇治中学校・高等学校

### 第52回ミニ企画展示

「ベトナムの経済発展とストリートチルドレン～開発の再考～」

会期：2010年1月9日(土)～1月31日(日)

### 第53回ミニ企画展示

2010京都博物館施設連絡協議会企画・新春ミュージアムロード企画

第15回ミュージアムロード「“体感”ほんまもの京都！」参加企画

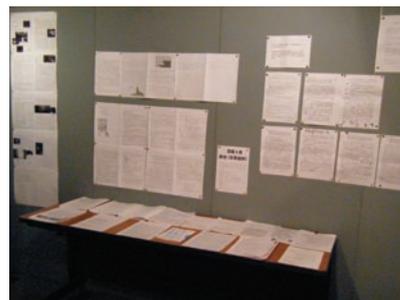
「京都:地図の旅～70年前の京都にタイムスリップ・京都で戦争の時代を考えよう～」

会期：2010年2月6日(土)～3月3日(水)

### 第54回ミニ企画展示

「カンボジアの子どもたちの光と影(仮)」

会期：2010年3月9日(火)～3月31日(水)



2009年度の立命館中学校・高校の展示の様子



2009年度の守山中学校・高校の展示の様子

## 映画上映会開催

上映作品「台湾人生」 2008年/カラー/81分 監督：酒井充子

上映日：2009年12月9日(水)

会場：立命館大学衣笠キャンパス アカデミア立命21  
国際平和ミュージアム 中野記念ホール

時間：1回目13：10～14：35

2回目14：45～16：10

対談：16：20～17：20

酒井充子監督×安斎育郎(立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長)

詳細はHPにてご確認ください。



公式ちらしより

## 第5回ボランティアガイド養成講座受講生募集(予定)

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、2009年10月には通算66万人を超える来館者を迎え、3,000校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示解説を中心に、展示物が語るエピソード、その背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。戦後64年が経過した現在、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと考えております。

そこで、ボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ていただくことを目的とした養成講座を開催しています。

2009年1月～3月に開催した第4回ボランティアガイド養成講座ならびに実地研修の修了生は、新たにボランティアガイドとして活躍しています。

より多くの方々にこのミュージアムを舞台として活動していただきたく、今年度も第5回養成講座を開催いたしますので、是非積極的にご参加ください。

2010年4月～7月は、養成講座修了生を対象に実地研修も開催します。

※2010年2月～3月の、毎土曜日または日曜での開催を予定しております。

詳細は国際平和ミュージアムのホームページにてご確認ください。

第17巻第2号(通巻48号) 2009年12月1日発行



## 立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行者

立命館大学  
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>